

氏名	井 上 孝 雄		
学 位 の 種 類	医 学 博 士		
学 位 授 与 番 号	乙 第 883 号		
学 位 授 与 の 日 付	昭和52年9月30日		
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)		
学 位 論 文 題 目	乳 癌 の 進 展 と リ ン パ 節 転 移 に 関 す る 研 究 第1編 乳癌の組織進展形式について 第2編 乳癌のリンパ節転移とくに胸部旁リンパ節転移について		
論 文 審 査 委 員	教授 寺本 滋	教授 小川勝士	教授 妹尾左知丸

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

乳癌では主病巣においては塊点型が多く、先進部においては微点型が多かった。Iyへの侵襲はT、Stageに関係なく強く、f、sへの浸潤はT、Stageの上昇とともに強かった。papillotubular ca.は塊点・塊点型が多くfへの浸潤は弱い、medullary tubular ca.は塊点・微点型が多くIyへの侵襲、fへの浸潤ともに強く、Scirrhouc ca.は侵襲、浸潤ともに強かった。連続型は侵襲、浸潤が弱く、点在型は強かった。胃癌と比べて乳癌のリンパ節転移は主病巣が微点型のものに多かった。

150例の乳癌において48%のリンパ節転移、20%にPs転移がみられn(+)72例では41.7%にPs転移を認めた。Ps転移はStage Iでも10.9%、Ax1ケ(+)でも33.3%にみられ、Ps郭清の必要性が認められ、組織型では分化型より未分化型に向うほど転移リンパ節数の上昇がみられた。リンパ節内反応からみると、SHの低いもの・FH(-)のものの組合わせではPs転移が多く、癌側の因子に加えて宿主側のリンパ節内免疫反応の重要性がうかがわれた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は乳癌に関する臨床的、組織学的研究であり、乳癌の組織進展形式について分類を行ない、またリンパ節転位とくに胸骨傍リンパ節転位について検討したものであるが乳癌研究上価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。